

草の根こぞう仙吉

せん
きち



赤木由子作
箕田源二郎画

草の根せんぞうきち仙吉



赤木由子作
箕田源二郎画

作者・赤木由子

1927年 山形県鶴岡市に生まれる。中国鞍山常磐高卒。戦後、作家をめざして、新聞・雑誌記者となる。

作品に「柳のわたのとぶ国」理論社。「はだかの天使」「ハンノキのくり舟」新日本出版社。「花と海の星座」童心社。「ひまわり愛の花」金の星社。「美しいぼくらの手」ポプラ社。「もう泣かないでおかあさん」偕成社など、他多数。

『日本児童文学者協会』『日本子どもの本研究会』『児童文学と教育・文化研究会』会員。

画家・箕田源二郎

1918年 東京に生まれる。12年間小学校教師としてすごし、その後は、美術の仕事に専念。美術文化協会、前衛美術会、日本アンデパンタン展などに出品。現在、日本美術会、美術家平和会議、童画グループ「車」、新しい絵の会などの会員として活躍している。

著書に「美術の心をたずねて」新日本出版社。「美術との対話」講学館。また、絵本に「ごんぎつね」ポプラ社。「火」岩崎書店。「赤い雲」童心社など、他多数。

そして子ども文庫 定価 1,000 円

草の根こぞう仙吉

1978年2月20日 初版発行

1978年6月10日 3刷発行

著 者 赤 木 由 子 ©

画 家 箕 田 源 二 郎 ©

発行者 松 江 隆 信

発行所 株式会社 そ し え て

東京都千代田区九段北 4-1-27

〒102 TEL (03) 264-1526

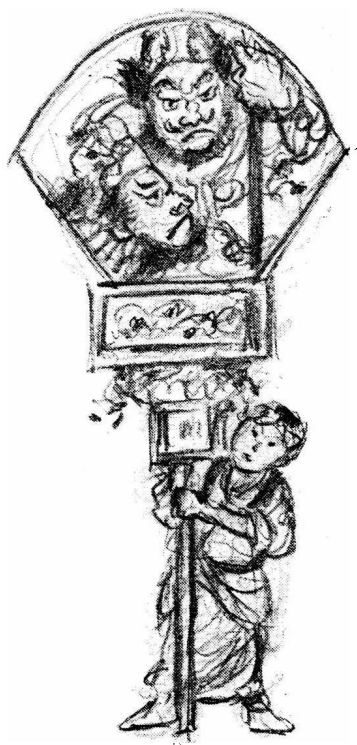
振替東京 4-21098

印刷所 (株)新日本印刷 (有)幸英社印刷

製本所 株式会社 難 波 製 本 所

NDC 913 248 p 202 cm 8093-05001-4268

も
く
じ



一章 ねぶた祭り……………5

1 竜神さまの石……………5

2 あくたれわらし……………17

3 エッペラセ・ラッセラ……………31

4 八甲田山と兵隊……………48

二章 人買い宿……………61

1 ベンジャとのわかれ……………61

2 ただれ目の子……………76

3 おかみさんとさとう湯……………90

三章 自転車小僧……………100

1 三日月さまの境内で……………100

2 鬼怒川のながれ……………113



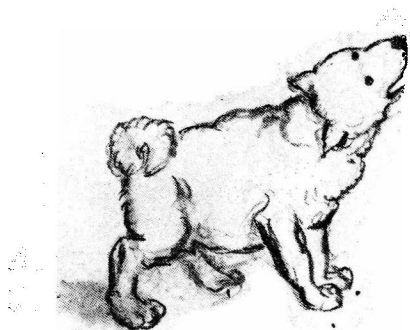
3	旅 たび から旅の女の子	121
4	皮 かわ のくつ	130

四章 のら犬のように

1	下町の麵工場 めんこうじょう	141
2	みぞれの町	154
3	にぎりめしのなる木	164
4	売られてたまるか	183

五章 失業都市・東京しつぎょうとし

1	ルンペンと煙突男 えんとつおとこ	198
2	これこそおれの仕事だ	215
3	戦争 せんそう をしらせる号外 ごうがい	228
	あとがき	245



絵

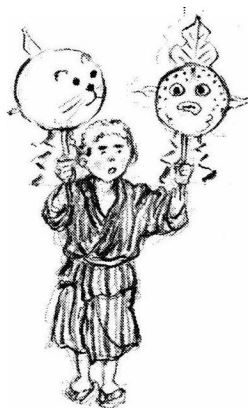
箕田源二郎

装丁

松本八郎

一章 ねぶた祭り

1 竜神さまの石



大正十二年の夏の朝、次郎はゆめのなかで、友だちと青森湾の海でおよいでいた。次郎が手をあげてさげぶ。

「武、源三、湾をでて、沖のほうまでいってみねが。」

「いくが。いくべし。」

三人とも、青森市の長島小学校の三年生だった。次郎はとくべつからだが小さかったが、およぎのほうは、大きい男の子にもまけないくらい、たっしやだった。

次郎たちは、沖へ、沖へとでていった。

「ひえっ。おっかねえ海だな。」

そのあたりは、波がさかまいて、どうどうと音をたてながらながれている。次郎は、海のそこ

に青く光るものを見つけた。

（あれっ。なんだべな。）

次郎は、ふかくもぐっていった。銀色の大きなシャケが、れつをなして、次郎の目のまえをとおりにすぎっていく。さらにもぐっていくと、コンブが林のようにゆらぐうすぐらい岩だなに、青い石が見えた。

リンゴくらいの大きさの、その青い石からは、みどりや、赤や、白い光がほとばしって、あたりをてらしている。

次郎は、うっとりとみとれて、つぶやいた。

（これこそ、ほんものの竜神さまの石だ。家の神だにまつてあるのとはちがう。これさえあれば、おらどこ（おれのところ）は、ジェンコ（銭）がもうかるぞ。）

次郎は、青い石を両手ですくうようにしてもち、足で、岩だなをおもいきりけって、海面にかびでた。

およいでいくうちに、おしっこがしたくなった。

（どうせ海のなかだから、かまわねじゃ。）

と、おもいきって、やってしまった。そのとたんに目がさめた。

そこは、階段のかげの小部屋だった。青い石はきえ、ふとんがぐっしりぬれているのに、次

郎は、気がついた。からだをずらして、ゆめで見た青い石のことをかながえていると、しみだらけのふすまが、ガタピシとあいて、むこうはちまきの母のハルが、顔をつきだした。

「次郎、いつまでねでるだ。おぎろ。」

母は、いつものように、ひとしきり、もんくをならべはじめた。

「まんず、くせえごと、くせえごと。このガキだば、大しよんべんたれのうえに、はなべちゃの、みだぐなしで（みにくくて）、どうしよもねな。」

次郎は、じぶんの鼻はなをそっとおさえてみた。「しよんべんたれ」といわれるよりも、「はなべちゃ」といわれるほうが、どんなにかつらかった。

店に客がきた。

「アバ（おばさん）、イワシ、十銭せちけへ（ください）。」

表具屋ひょうぐやのせい子の声だ。せい子も長島小学校の三年生で、おとなしい子である。

「はあえ。いま、いぐよ。」

母は、うってかわって、やさしい声をあげながら、店へはしっていった。

次郎の家は、小さな魚屋さかなやだった。

次郎は、はねおきて、まるめたしきぶとんを、「どっこいしょ」と、頭にのせ、ふらつきながらうら庭へでていった。

「うえ、まふしじゃ。」

朝から太陽たいようがてりつけていた。たらいでせんたくをしていた姉あねのとよが、わらいながらふとんととって、さおにかけてくれた。

「次郎じろうこや、ねまき、ぬぎへ（ぬぎなさい）。腰こしのまわり、かゆいべ。いま、ふいてやるがら、まってな。」

とよは、ぼろきれを水でしぼって、次郎のおしりのまわりをふいてくれた。

次郎は、姉のとよが家にいてくれると、うれしくてたまらない。みんなが、「次郎」とか、「このガキ」とかいうなかで、とよだけは、「次郎こや」と、やさしくよんでくれるからだった。

しかし、ことし十三歳さいになるとよは、めったに家にいなかった。小学校にもいかしてもらえず、六つか七つのときから、よその家の子守もりや、お産さんの手つだいにだされていたからである。

次郎は、ぼさぼさにのびたかみの毛をかきあげて、とよのまえに顔をつきだした。

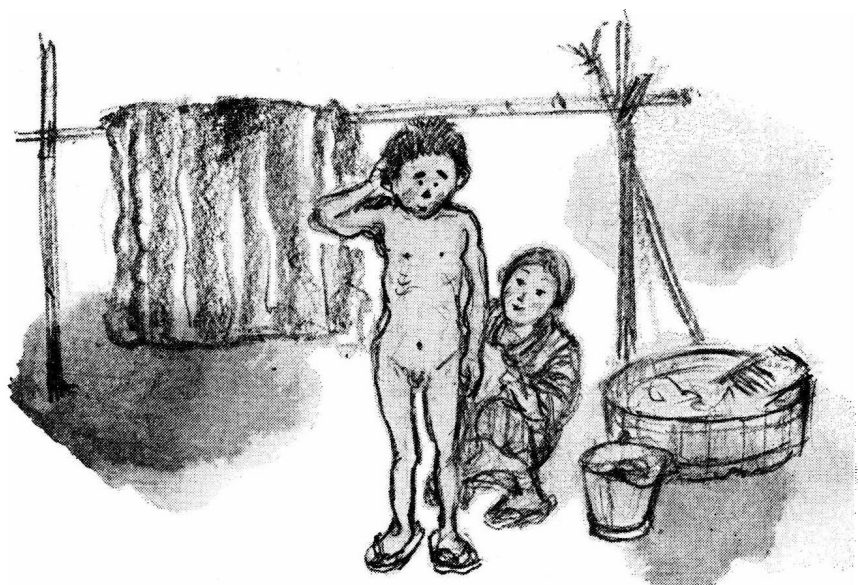
「姉、おれの顔、はなべちゃで、みたぐねが（みっともないか）。」

とよは、ひとえまぶたの、黒くすんだひとみで、じっと、弟の顔を見つめた。

「なも、みたぐねぐねよ（みっともないことないよ）。」

「したって（だって）……。」

次郎が口をつきだした。とよの顔が、かすかにくもったように見えた。



「また、アバ（おかあさん）が、そういったんだべ。次郎こや、顔のことなんか、気にするでねよ。」

と、いって、バケツの水を手ですくって、しきふとんのねしょうべんのあとにふりかけ、かわいたぬので、ごしごし、こすってくれた。

「これで、すこしは、におい、とれるべ。」

店でどなりたてる母の声が、うら庭まで、つつぬけにきこえてきた。

「とよーっ。みんなさ、はやく、ママくわせろ。」
「はえっ。」

とよは、とびあがって、ぬれた手をまえかけでふきながら、だいどころ台所^{だいどころ}にかけこみ、おひつをかかえて居間^{いま}へはしった。そのあとから、はだかの次郎が、みそしるのなべをさげていった。

いろいろのそばの飯台^{はんだい}のまわりに、いつも元気の

ない父の仙助^{せんすけ}、十八歳になる長男の俊正^{としまさ}、五つの三郎^{さぶろう}と、三つの四郎^{しろう}がすわっていた。

家のなかでは、父よりいばっている俊正が、次郎をにらみつけてどなった。

「てめえ。はだかで、なんだ！」

「ひえっ。」

次郎^{じろう}は、となりの部屋^{へや}へとびこみ、タンスをかきまわして、ようやく、じぶんの着物をさがしだした。つんつるてんの、その着物にそでをとおして、居間^{いまた}にもどると、俊正^{としまさ}が、イワシのつけを、はしのさきではじきながら、目くじらをたてていた。

「とよ。こつたらおかずで、ママくえるもだな（くえるものではない）。アバにいて、イカのさしみでも、もってこいじゃ。」

みそしるをつぎかけていたとよが、びくつとして、

「あ、それもそうだな。いま、もらってくる。」

と、あたふたと、店へはしっていった。

とよのきているものは、おばあさんがきるような、じみな着物で、肩^{かた}にはつぎはぎがあたっていた。

次郎は、せつせとごはんをかきこんだ。三郎も、四郎も、俊正をうわ目づかいに見ながら、だまってたべていた。

次郎と弟たちは、ほんとうは、谷村仙次郎、仙三郎、仙四郎という名まえだが、家のものも、近所の人も、次郎、三郎、四郎と、てみじかによんでいた。

父の仙助が、俊正のわがままをおさえきれないのは、俊正だけが、父親がちがっているからだ。次郎たちの母は、さいしょ、むこをとって俊正を生んだが、そのむこが、ころっと死んでしまったので、二どめの夫をむかえ、つぎつぎに六人の子を生んだ。

その二どめの夫が、次郎たちの父の仙助で、六人の子は、上から、みさ、仙太郎、とよ、仙次郎、仙三郎、仙四郎である。

貧乏人の子だくさんというが、次郎の兄弟は、父親のちがう俊正もいれて七人になる。ただし、みさと仙太郎は、もうこの家にはいなかった。

長女のみさは、いまから三年まえの、夏のある日、芸者の下地っ子に売られていった。下地っ子というのは芸者の見習いのことをいう。そのとき、みさは十三歳だった。人買い男に手をひかれていくのを、町内のおばさんたちも、通りにでて見おくった。次郎は、家族のひとりがいなくなるのが、たまらなくさみしかった。

人買い男とみさが、柳町の通りのはずれにある、火の見やぐらから、左へおれて見えなくなる、母は、そそくさと家のなかに、はいってしまった。

柳町から、青森駅までは、子どもの足であるいても、十分たらずだった。次郎は、駅までみさ

をおくろうとおもって、かけだした。その足が、四、五軒^{けん}さきの米屋の店のまえで、とまってしまった。

おばさんたちがかたまつて、口ぐちに、みさのうわさをしていたからだつた。

「みさちゃん、きりょうよしだから、さぞ、いい値^ねで、売れたべな。」

「このあと、二、三年もすれば、こんどは、妹^{いもうと}のとよちゃんを売るんだべな。とよちゃんだば、もっといい値^ねで売れるべよ。」

「したども（だけども）、芸者^{げいしや}に売るのは、かわいそうだ。どうせ売るなら、せめて、糸^{いと}ひき女工^{めいこう}にでも、売ればいいべの。」

「糸^{いと}ひきだば、ジェンコ（銭^{ぜに}）、たくさん、はいらねから、家のたすけになんねえだべ。」

こうして、みさがいなくなった一年あとに、仙太郎^{せんたろう}が、弘前^{ひろさき}の町^{まち}の大工^{だいこう}の家に、小僧^{こぞう}にやられたのだった。

次郎^{じろう}が、みさと仙太郎^{せんたろう}のことをおもいだしていると、俊正^{としまさ}が、店にむかってわめいた。

「とよ。さしみ、はやくもってこい。」

「いま、もっていぐとこだ。」

居間^{いま}にかけあがってきたとよは、俊正^{としまさ}のまえに、イカのさしみの皿^{さら}をおいて、ようやく、じぶんのごはんをよそった。

次郎が、とよのふくらとした白いほおや、紅べにをつけたような小さな口もとに、みとれていると、こんどは、ぶしょうひげをはやした父が、ぼそぼそといった。

「とよ。おれに、なまたまご、もってきてくれねが。」

「いま、もってくる。」

父は、とよが台所だいどころからもってきた、なまたまごを、小鉢こぼちのふちでわった。父の茶わんのごはんの上で、たまごの身が、ゆっくりとひろがるのを、三郎さぶろうと四郎しろうは、くいつくような目つきで見えていた。

がまんのできなくなった三郎は、店の母にむかって鼻はなをならした。

「アバ、わも（おれも）、たまご、くいてじゃ。」

居間いまと店のあいだのしょうじのガラスから、母が目をはそくして、こちらをのぞいた。

「三郎こか。いまいぐから、まってれ。」

居間いまにあがってきた母は、いつものように、ススだらけの神だなにかしわ手をうち、

「とよ、たまご、ひとつ、もってこい。」

と、いいつけた。

神だなにまつてあるのは、母が海からひろってきた、まるくて青い石だった。母は、それを竜神りゅうじんさまの石といていた。

母は、いろいろのそばにすわると、ためいきをついていった。

「イワシ、一銭^{せん}で二十本にしたって、売れねじや。これじや、どうせばいいんだか。」

とよが、また、たまごをひとつ、もってきた。母は、かきまぜたたまごを、三郎^{さぶろう}のごはんに分かけて、のこりをそのまま三郎のまえにおいて、しらん顔^{しらん}をしている。

いちばん下の弟の四郎^{しろう}が、はしのさきを口にくわえて、べそをかきはじめた。それでも母は、しらん顔^{しらん}をしている。

いつでもそうだった。母は、どういうわけか、よで子^{よでこ}（末っ子^{すえ}）の、しかも、まだ、三つになったばかりの四郎より、五つになる三郎をねこかわいがりにかわいがっていた。男の兄弟のなかで、三郎だけが鼻^{はな}すじがとおって、きりょうがいいからかもしれないと、次郎^{じろう}は、腹^{はら}のなかでおもっている。

父と三郎は、たまごでごはんをかきこみ、俊正^{としまさ}はひとりで、イカのさしみをたべている。

（ふん。よく、じぶんらだけ、すきなおかずで、ママ、くえるもだな。）

と、おもいながら、次郎は、イワシをまるかじりにした。

四郎が、とうとう泣き^なだした。

「アバ、わも（おれも）、わも、たまご、くいてじや。」

母は、歯^はぎしりをして、末っ子をにらんだ。